

報告

養護教諭の児童生徒との関わりから見たケアと執務遂行上の課題

岡田久子 坂本雅代 尾原喜美子 高橋永子 齋藤美和 藤田晶子

(高知大学教育研究部医療学系看護学部門)

Important points for special education teachers clarified through Caring
for and teaching their students

Hisako Okada Masayo Sakamoto Kimiko Ohara Eiko Takahashi Miwa Saito Akiko Fujita
(Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit, Nursing Sciences Cluster)

要 旨

本研究の目的は、養護教諭が児童生徒のケアに必要とする看護上の課題と執務上の課題を明らかにし、教育支援の示唆を得ることである。対象は、A 県に勤務する養護教諭390人で、方法は無記名自由記述調査である。その結果、看護上の課題は【ケアに対して自信が持てない】【最新の医学・看護の情報不足】【ケア環境の限界】の3カテゴリーがあり、執務上の課題は【個々の児童生徒と向き合うことが困難】【役割間の連携と情報の共有化】【児童生徒の生き方を支える】の3カテゴリーが明らかになった。養護教諭の教育支援には、学習ニーズに対する支援と教職員等との連携のあり方への支援の必要性が示唆された。

キーワード：養護教諭、児童生徒、ケア、執務、課題

Abstract

This study aimed to determine challenging issues in caring and teaching for children with special needs in order to promote educational approaches. An anonymous self-description questionnaire survey was conducted involving 390 special education teachers working in A Prefecture. As a result, 3 categories were observed in both caring and teaching. The former included <a lack of confidence in the quality of care>, <insufficient updated medical and nursing information>, and <a limited care environment>, while the latter included <difficulties in dealing with individual students>, <the need to cooperate and share information with other staff>, and <supporting students in living their lives>. These results suggest that it is necessary for special education teachers to provide educational approaches meeting the learning needs and promoting communication with other staff.

Keywords: special education teacher, students with special needs, caring, teaching, challenging issues

受付日：2011年7月2日 受理日：2011年10月17日

【諸 言】

平成20年1月中央教育審議会答申において、「子どもの現代的な教育課題に適切に対応していくためには、常に新たな知識や技能などを習得していく必要がある」とし、子どもの心身の健康課題の多様化や養護教諭の役割拡大に対応した研修の充実の必要性が指摘された¹⁾。そこで、現職養護教諭がケアに関する知識や技能をどの程度習得しているのかを明らかにするために、その実態を調査し、2010年「養護教諭が行う看護技術の実施状況と自信の程度²⁾」として報告した。その内容から養護教諭に必要な能力には、児童生徒の健康課題をアセスメントし課題解決していく能力、健康課題への対応力、心理的訴えに対応するために必要な看護技術があり、それらを教育の中に組み込んでいく必要性が示唆された。

今回は、養護教諭が児童生徒のケアを実践する際にどのような対応上の問題を抱えているのか、その実態について、看護上の課題と執務上での課題を明らかにし、養護教諭の教育支援の示唆を得ることを目的に検討したので報告する。

【研究方法】

1. 対象者：A県下に勤務する全ての小学校210人・中学校110人・高等学校58人・特別支援学校12人の養護教諭390人（A県養護教員協会会員の学校より選択）

2. データ収集方法：

1) 調査方法：無記名による質問紙調査

2) 調査内容：

(1) 対象者の属性：年齢、勤務年数、養護教諭取得最終学校、看護師免許の有無

(2) 自由記述：

①児童生徒のケアに必要とする医学的知

識や看護技術・看護ケア

②仕事をする上での課題や困っていること

3) 回収方法：各養護教諭宛に、調査用紙と一緒に研究の目的・方法・倫理的配慮等を記した説明文書・返信用封筒を同封し、郵送配布した。回収は、対象者の自由意思で投函してもらった。

3. データ収集期間：平成21年10月1日～11月30日

4. データ分析方法：看護上の課題と執務上での課題の意味内容を整理しカテゴリー化した。

【倫理的配慮】

研究の参加は自由意思であり、参加を拒否しても何らの不利益を被らないこと、個人情報取り扱い等の説明文書を各養護教諭に郵送し、個人の自由意思により回答を得た。なお、本研究は、高知大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。

【結 果】

1. 対象者の背景

回答は養護教諭390人中98人から得られた（回収率25.1%）。年齢50歳以上が48人（49.0%）、勤務年数30年以上が41人（41.8%）、養護教諭資格取得最終学校は短期大学68人（69.4%）、看護師免許の有無は看護師免許なしが78人（79.6%）であった。そのうち記述回答があった34人のデータ分析を行った。

2. 養護教諭のケアと執務遂行上の課題

養護教諭が児童生徒のケアに必要とする看護上の課題には、3カテゴリー、8サブカテゴリーと執務上での課題には、3カテゴリー、8サブカテゴリーが導き出された。以下に各内容（【 】はカテゴリー 〈 〉 はサブカテ

ゴリー）について説明をするとともに、具体例を斜字で示した。

1) 看護上の課題

【ケアに対して自信が持てない】とは、ケアを実践する際に必要な医学・看護学的知識や、ケアの方法が分からず、実践を手探り状態で行っていることであり、サブカテゴリーは〈医学的・看護的知識の不足〉〈知識と実践の関連不足〉〈ケアへの方向性が描けない〉であった。

「短大で歯科の分野は結構専門的に学んでいます。看護婦(師)の免許、資格を取得する学習をしていない。医学的・看護的な知識の多くは、仕事を始めてからのもので、自信ありといえない弱さがある。」「十分看護の知識を身につけているつもりでしたが、実践には結びついていない。」「まだ養護教諭として未熟であり、探り探り日々がんばっている。」

【最新の医学・看護の情報不足】とは、ケアに必要な最新の情報や看護の知識・技術を得るために、学習へのニーズや、計画的で継続的な学習活動への意志を示していることであり、サブカテゴリーは〈学習機会の確保〉〈学習継続への意志〉であった。

「看護の知識や技術が十分ではないため、知識・技術を学ぶ場所や情報の提供がほしいと感じる。」「自己満足している面も大きいので、学習の継続(研修)を自ら計画し実践していかなばいけないと考えている。」

【ケア環境の限界】とは、怪我や健康障害で手当てを行う際に、必要な医薬品や衛生環境が整っていないことへの葛藤であり、サブカテゴリーは〈医薬品の不足〉〈保健室の衛生管理〉〈処置方法の違い〉であった。

「医療機関が当たり前に使っている医薬品がなく、代用する思考・技術が必要となる。」「保健室での清潔区域・清潔操作、どこまで必要かが知りたい。病院とも違うが感染も気になる、砂まみれの子もたちを相手にしていると、曖昧になってしまう。」「看護技術の視点から言えば創傷ケアの際、湿潤療法な

どをしている家庭から学校における手当てにクレームが付くこともある。」

2) 執務上の課題

【個々の児童生徒と向き合うことが困難】とは、就学援助児童の増加に伴う時間確保の難しさや多様な役割への対応を迫られ、個々の健康課題への対応が困難なことであり、サブカテゴリーは〈1人1人と対応する時間確保が困難〉〈多様な課題や役割への対応に迫られる〉であった。

「就学援助の児童数が増え、いろんな書類があって、児童とじっくり向き合って話を聞く時間が少ない。」「アセスメントシートを利用して、問診をしたりしているが、時間がとれないことがあり、・・・十分な対応ができにくいと感じる。」「問題行動(非行)発達障害(と思われるも含め)が多く、その児童達への支援、対処が主な業務となり、健康課題への取り組みが不十分になってきた。」

【役割間の連携と情報の共有化】とは、各々の立場での役割分担や考え方の違いを踏まえたうえでの連携や情報共有が必要であることであり、サブカテゴリーは〈養護教諭としての判断力〉〈連携の不備〉〈役割分担と組織化〉〈見解の相違〉であった。

「回復が無理(原則健康な生徒が対象なのであくまで応急処置に徹しなければいけない)と判断した場合は、すぐに、保護者へ連絡し、早退等処置を取らなければいけない。」「相談機関へつなげてもらう時間がかる。」「各々で役割分担をして、各々の立場の動きをしてほしいが、養護教諭が何人もいるように感じることもある。」「教師によって、根本的な考え方の相違がある場合、一丸となった取り組みは期待できない。」

【児童生徒の生き方を支える】とは、教員として児童生徒と向き合い生活を支え問題解決をしていくことが必要なことであり、サブカテゴリーは〈成長への支え〉〈向き合う姿勢〉であった。

「日々職務の中で看護に要する時間は少なく、特

に最近では、心理面や教員としての役割に占める時間が増えた。」「養護はその生徒自身(人)と向き合い問題解決し、これからどう生活していくか、常に考えなければならないと思っている。」

【考 察】

養護教諭の職務は、学校教育法で「児童生徒の養護をつかさどる」と定められており、平成9年の保健体育審議会答申において新たな役割として健康相談活動の重要性が示されている。また、平成20年中央教育審議会答申では、救急処置・健康診断・疾病予防などの保健管理、保健教育、健康相談活動、保健室経営、保健組織活動などが役割として述べられている³⁾。養護教諭の仕事の特質として、藤田は⁴⁾、子どもの健康を守る仕事のなかに育てる働きかけを自覚的に組み込むことが大切であると述べている。そこで、これらの養護教諭の役割や特質を踏まえて看護上の課題と執務上の課題について考察する。

1. 看護上の課題

養護教諭に必要とされる看護能力として、心身の健康状態を的確に判断できる観察力や傷病者に対する救急処置能力などがあげられている⁵⁾。今回の調査では【ケアに対して自信が持てない】があり、これは養成課程の違いや養護教諭としての未熟さが児童生徒の訴えに対する判断やアレルギーへの対応など専門性の弱さに繋がっていると考える。また【最新の医学・看護の情報不足】や【ケア環境の限界】なども自覚していた。

これらの課題が導き出された背景には、教育・福祉・看護系の多様な養成課程があるとともに、教育期間も2～4年と教育の幅が見られ、ケアを実践するために必要な判断や実践方法を生み出す看護力の差に繋がっていると考える。また、養護教諭は各学校1～2名の配置であり、新人であってもその職務を1

人で担うことから、知識不足による関わりへの戸惑いやケアを行う際の衛生環境を調整することが厳しい状況に置かれていると考える。そのうえ、専門的なことについて身近に相談する者もおらず不安を抱えながら、日々のケアに関わっていることが窺われた。これらへの対処としては、養成機関と教育委員会が連携し、養護教諭が必要とする学習ニーズに応える研修内容を検討していくことが必要であるとともに、養護教諭自身が児童生徒の健康を守るために知識と実践が結びつくような看護力を高めていくことが重要であると考えられる。

2. 執務上の課題

養護教諭として、児童生徒の成長発達を支援するには、児童生徒と十分に向き合う時間が必要であるが、【個々の児童生徒と向き合うことが困難】が見られた。これは、多様な課題や役割を背景に時間的な制約などが影響し、児童生徒に十分に向き合えていないことであり、養護教諭実践において、藤田は⁶⁾、「対話を通して子どもをつかむ」「子どもと一緒に問題をみつめ課題を考える」ことを述べているが、これらが阻害されやすい状況にあると考える。また、児童生徒の健康課題の対処には、養護教諭一人では解決はできず、学校内外の組織としての関わりが不可欠となる。しかし、【役割間の連携と情報の共有化】や【児童生徒の生き方を支える】などの課題が明らかとなった。養護教諭の立場は、ケアを通して児童生徒の成長発達を見つめる機会が多く、その情報を共有することの難しさがあると考えられる。

組織的な活動の要点として、藤田は⁷⁾、児童生徒の実態から出発した取り組みを見出し、教職員を巻き込んだ渦づくりについて述べている。つまり、児童生徒のもつ多様な側面を教職員で常に情報を共有し、組織として健康課題に取り組むことが大切となる。その

為には、養護教諭は児童生徒との関わりの中で捉えた実態を丁寧に把握し分析することや、その課題を学校の実情に合わせて提案できる力が必要となる。また、日頃からの意志疎通や情報交換など、教職員と関係性を構築し、個々の役割に応じた対応ができるよう学校内外のキーパーソンとなり調整していく力が必要となる。養護教諭が知識に基づいた判断や対応ができることが重要であり、今、養護教諭に求められている健康課題解決にあたってのコーディネーター的役割を踏まえて支援していくことが必要であると考ええる。

【結 論】

看護上の課題には、知識や技術の差による対応上の困難さがあり、執務上の課題には、児童生徒と向き合い、組織化していくことの困難さが挙げられた。養護教諭の教育支援には、知識や技術への学習ニーズに対する支援

と教職員等との連携のあり方への支援の必要性が示唆された。

【文 献】

- 1) 文部科学省：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について．8．中央教育審議会答申．2008
- 2) 岡田久子他：養護教諭が行う看護技術の実施状況と自信の程度．高知大学看護学会誌．4巻1号．43-49．2010
- 3) 前掲1) 7．
- 4) 藤田和也：養護教諭が担う「教育」とは何か．40．農文協．2008
- 5) 中桐佐智子他：最新看護学 学校で役立つ看護技術第4版．15．東山書房．2007
- 6) 前掲4) 99-103．
- 7) 前掲4) 76-79．